

第六回海句双紙

中村俊定文庫
文庫 18
779





大正十一年四月二十三日

大正十一年四月二十三日



大正十一年四月二十三日



大正十一年四月二十三日
大正十一年四月二十三日
大正十一年四月二十三日
大正十一年四月二十三日
大正十一年四月二十三日

先如坊ううとみ米うとといふ
柱を柱と一嵐を雲う輝とおよ
いぬ名、月の梢茂棟と一夫さう
るのち中の柱本を桁と一其角
うはとを曲しまうぬ榊を虹梁
と一酒米とやすもさる竹茂

意木と一去来う夫と一
すきをせ身と一其ら材の
たらぬ茂補ふみと一ふと
たの材ふと一月のまさうり
えと一取らあゆと一敷ふ身せ
みかしくしたやすれ事よと一

を満 影子い たりき の へんり ち
 法 歩 松 空 鳳 ちりり ち子

久仁十四丁丑四月



第二四海句双紙

四時叢句之部

日本東都玉蕉菴輯



きつら〜ちやい 清き〜あのみおけ	秋田	永我
はなをそ名よきをり 影射やす〜おま		峯梅
大原や 栲の 障〜 影うに ちちり		其竜
西の 垣〜 影を ちり〜 影を せんせり		秀英
影白や 西の 影除 掃〜 影〜 ちり		乙喜
影〜 影〜 小影も 影の 影か 影	余三	湖翠
影〜 影〜 影も 影〜 影〜 影		可翠
影〜 影〜 影〜 影〜 影〜 影	全六	朗明

灯なり影也 老母の秋上り秋を待
 みの戸を二月先かきる小松の形
 等閑に捨てるもさき秋の柳に本
 物秋をとおしあけけし旭か形
 ちりしあおきのもひかんのこのうら
 事のおおゆるよさるをねたさし
 きるかにはほくもあを呼まら山
 片あめて長秋をかこころをさか
 夏はの傍るをさかを帰る原
 ときあみそくを鳴らけおの原
 方きも鼻もかけけく免のそね
 人影を風らひくくや冬は月

秋田十冬 文好
 全千三 可貞
 全小三 文栗
 信吉田 五葉
 何九 自耕
 楠花 尚故
 楚泉 子文
 鬼城

黄を秋をくく投くく連之か南
 きりくは鳴や俱れ早かまを
 山吹り水きよく川下南
 能くくくき白ひあるはく毒
 兄弟はく中へ似しきり月
 細赤く久米路を向へ山二り
 山里くくは味く身を梅のそ
 名月く秋はくくハ露か落る音
 雨く秋をほくく結りき柳赤
 立陣り具かくしりく結柳赤

全千林 昌曉
 全百 半月
 全百 魯川
 全百 花僊
 全百 斗石
 全百 子郷
 全百 南山
 全百 辨地
 全百 佐人
 全百 玉芝
 全百 呂桂

見りたるひよ奥あはる梅の落月夜
暖きさるる雪う見ゆらそ冬牡丹
見たりや花をぬくとも交本立
糸起ハ身のおろろへう布くそ平
一時を堪り菜あまなく鳥か平
炭かほりさうりひはれさそと平
りしきり隔るるもれは雀乃子
蕨垣を毎日くはるるよひのね
山寺にすくもや雪の出るはら
油引しそおろろよせまら夕へ春
まきのおろろとら限る阿田の舟
木のしや無はのくへは小松川

梨月 は南長池
文仲 全押カ子
可柳 全荻所
其涯 全垣石
曾夫 全平出
文雅 全赤木
君山 全西ワタ
杉長 房州
竹由
桃阿
斗白
柞枝

冬はあのを余りや刻むるのし
居坐るまゝ一 堪上ぬか啼し今点
落しぬあはるそ何んやそ花は空
浦に雪は清きとらそ宿かそむ
常中人ももぬきぬはるのし
寛平をそ危かくつあおれ後の月
土川かめとそ寂けくおれ月おれ
美くそまナつ後とそまそ風もあり
夕露木の間に人乃掃て居る
涼のあはれぬそそ葉にそそ花のね
祢きれ香のほしそおれぬまのね

東居
平雄 江戸
夜重
義郎 ヨハリ
多陀寸 相カテ
從周 本岩
如蘭
烏溪 ヒメナ
貫露 武カハラ
嶺波
嶺秀
後沢 おしよ
廿

おろしとのふ妙をわよ目も立を危
菊のよきややうくハ静れをこい啼
多くとけよ免てさかりらるる花の盛
片玉根ハ古ハ枯れ茂あ〜後
美をよの好いとよまより脊戸の松
まろむの好まよ身ハ山修の形
うら水子たろ〜動手なりる合の意
啼〜の〜啼〜入〜静〜ゆ〜ゆ〜程
あり〜や万葉わの象みやこ入
山伏〜一犬死〜く〜は〜く〜一〜く〜終〜引
竹子鼻あて〜ころ蟻の安とまきり
流をまよ〜ひつば〜ひ〜て〜ま〜る〜蘇〜か〜形

三河 秋挙
敬之
、 謀老
、 和樂
、 真文
、 霞石
、 葉所
、 巴洲
、 松坡
、 茂陵
、 公雅
ヨカリ 渭川

曲乃形似枝て〜あ〜る〜を〜表〜の〜花
啼や〜の〜葉〜乃〜木〜を〜く〜は〜き〜す〜村
白妙や大か〜る〜雪〜北〜降〜止〜中〜の〜以
あせり静れれ中よ免〜も〜て〜あ〜れ〜之
水多〜也〜波〜を〜く〜し〜は〜く〜 魂
思〜く〜好〜極〜は〜け〜清〜く〜扇〜か〜多〜
美〜る〜れ〜氣〜長〜く〜千〜形〜く〜如〜竹〜乃〜奥
梅〜の〜く〜遠〜山〜ま〜ろ〜く〜具〜色〜を〜形〜季
よ〜か〜極〜へ〜ふ〜あ〜其〜其〜は〜終〜母〜子〜子
ま〜け〜〜川〜や〜や〜火〜中〜乃〜う〜は〜め〜際
明〜れ〜を〜振〜安〜也〜南〜川〜ま〜る〜花〜枝
空〜い〜と〜れ〜小〜ま〜も〜止〜ま〜る〜川〜は〜く〜終

三河 楚岳
、 保舟
、 鳳兮
、 楓村
、 宜彦
、 東雅
、 守静
、 其孫
、 文貫
、 芳武
、 奥ノ戸 雅雅
ヒノキ 都雀

春耕位ハ下キ 春耕
 鼻鳥全千本松 鼻鳥
 東籬全スサカ 東籬
 和有米沢一本柳 和有
 松雨 松雨
 杜郷 杜郷
 吳山 吳山
 孤舟 孤舟
 一瓢房持本 一瓢
 東江戸 東
 成蹊武出来三 成蹊
 蟻山 蟻山

呂月 呂月
 街住常下キ 街住
 義郎江戸 義郎
 棉亭十六様二 棉亭
 半兔 半兔
 宗寿上丹作田 宗寿
 子賢全行川 子賢
 周里全山田 周里
 春人房アッ 春人
 梅月 梅月
 如泉 如泉
 野楊丹カ山 野楊

永きりそとふと千つらうとそ芳徳山 畠田 岐陽
 永きりそとふと千つらうとそ 奥三春 俳佛
 早わつらふと千つらうとそ 全八戸 一窗
 水戸 水戸 花笠
 伊七 伊七 箏村
 志厚 ヲ八戸 志厚
 青荷 武クマキ 青荷
 麥之 信北ヲカ 麥之
 米蔵 十二文 米蔵
 秋風 秋田 秋風
 文成 文成 文成

冬た日ものひらきとて啼かす 羽米沢 不杖
 木はしむと冬を越えて返に有る 孤立 孤立
 東山 東山 東山
 松や秋風吹 木ッ 石羊
 多しとまきとて 松 松
 松蔭のおも 西湖多平 千風
 子菽や何 几 几
 耕をそ 几 几
 花 全大ニラ 花
 湖乃 全大ニラ 湖乃
 雲 房加戸 雲
 名 房加戸 名

涼しき水も形も人か
飲まぬ葉も林も
露も朝も
片所を月夜も
春風も
雪も
仮り知
陽
三日月
花
花

房東 和聚
全サキ 東之
全冬山 桂羅
羽米 咫雲
司曉
鬼考
杜五
文董
葵北
梅價
武陵
羊里

讀莊子

月も水も形も人か
飲まぬ葉も林も
露も朝も
片所を月夜も
春風も
雪も
仮り知
陽
三日月
花
花

房東 兎佛
房宮下 素共
全本花 吟風
全ソノ 棠高
全片ヲカ 有則
全大又キ 方固
上サキ 秋等
上サキ 志彦
上サキ 總人
上サキ 棠雨
上サキ 直文

岨乃木や旅の西行きを降
羽米沢
 文瑠
 杜橋
 吟峨
 志省
 可明
 吕童
 乙顔
 冥
ヨシキヤ
 金風
 魚文
 大素

母子子くた形のたもろよ事や
 花の宿素湯も葉扱も白ひんや
全子升カ
 芳高
 睦之
江戸
 陶里
ヒタキ
 蝶舞
 彩雅
 一色
房白ハ
 雨鱗
ニカケリ
 其杖
全草谷
 文茂
全形古
 彩葉
 秋等
 五柏
上井原寺

碑面

吹浦千舟引むけに月夜舟
 水飯の箸もち形のし見る龍波
 人妻の眉ねしむ形り菊日和
 静波^岸ちるる欠の男をさししに
 正月ちるる欠ぬける柳の形
 墨跡をるるの降し形り春の雪
 小流千一草蒲咲くや尻の宿
 妻の田也^田響く門木千一をるる世に
 燈籠就乃三日月く形みそき
 散梅の香よさひとちるる女舟
 燈のまをるる形りや柳の花
 花咲ぬるその千此木もいふまに

羽米沢 白魯
 五峯
 吟歩
 系休
 三人
 鶯溪
 碧山
 雨岡
 米舎
 低居
 文骨
 東里

梅ちるる後^後形りも月も四日の形
 水くはき夕と形りる梨の花
 葉の酒^酒勢の形りるひるり
 ひるり火を焚ぬ家形りる年竹
 ねもちるるも何屋るる多し^多の月
 青柳や美人乃阪馬の名
 実ちるるや^や酒二^二千^千の^の流るる門
 うかき猫瓶^瓶ちるる見^見る^る追^追形り
 小瓶しと^し形りる上^上の^の笛^笛を^を歌^歌へ^へ危
 子の戸^戸の^の火^火の^の影^影さ^さす^すは^はる^る去^去及
 法^法文^文を^をむ^む人^人よ^よ形^形茶^茶も^も屋^屋手^手を^を歌^歌へ^へ
 曼^曼と^とち^ちる^る人^人ら^ら意^意ち^ちり^りち^ちり^りは^はる^る

房千代 一盛
 房三郎 梅子
 全北極 買風
 後前^{後前} 逸東
 上^上井^井天^天神^神山^山 江澄
 井^井七^七千^千三^三 千秋
 寺^寺皆^皆言^言 子候
 全^全大^大露^露 富水
 羽^羽未^未沢^沢 五峯
 全^全秋^秋 露牛
 全^全秋^秋 山水

わづはくハ古く代々くく芥 萩 采沢 松径
 偏とともふるり 志所を萩の雨 采沢 古翠
 万葉のちやーあてさり人乃恵 暁兼
 菽村やほろろつれおけてまゝ 太橋
 夕立やたつ朝比奈のちきり通し 踈竹
 まゝとてつら狭さよるり 糞 羽良寺 淋山
 吹まへは柳よ乃さるれ舞かぬ 瑞元
 かきつりさるゝあも世並の家はくち 根二
 死ぬハハまふもまじり 左洲
 鶯かひぬ里も明り 乙韻
 旅人も松乃たつはなかに毛も 乙塙
 大徳乃袖かたけ出さり 柿のしん 秋夫
コノ本ニヤ

唐くさる形くそ 牡丹を吹く日の形 水戸月夜 素王
 黄龍こ枝をこ見よりけはき絶た 古欄
 ちくくちる目もまゝとるりか 小袖 求山
 山ふたの山吹なるめ 月夜あつて 墨江
 菟波よりつるやかろてふすまゝ 遅暎
 りまろや賣まは砂にハ待てまのり 李蹊
 明安きゆらも片葉の芦乃舟 守緒
 花芥子のうへをまお矢は雨りルと 青峨
 多と括ても只もみゝまぬ是てな 晞酉
 身もろりやまのさるゝ 旭鳥
 梅櫃の突つたあつと時るり 風狸
 須戸乃はまくと明安ま月夜かこ 雲草
信州上田

一婦一ハあまこ葡萄のさめをさりみ
 とまきこやいまもても涼一あまの娘
 女すねむのう一さくらやむのさる
 日さしこ此面を足よ出り二月か
 日おゆゆとちりし心一秋の山
 そのの戸よはく人さるやさるの月
 影かけや目さる押合ふふなり中
 出せたり化粧さるこり一藤のさる
 桐のまかたりけぬくさる一春の月
 雨のぬめたりひし川生てさるさる
 けりまをさるさるも思ふあを虫のぬく
 ひさきさりり甲もかきさるぬく蛙

下フサ 春月尼
 ミナク きよ女
 采沢 ちき女
 スカ川 多代女
 仙タイ 亀丸女
 木名 狸尾女
 多 茂と女
 多 子ヨ女
 多 錦雀女
 多 月夜女
 多 志満女
 多 こと女

水戸 演略女
 辛ノ紫 成布女
 ハニツ ちかぬ女
 采沢 宇福世女
 悠合 春え女
 悠合 春柳女
 秋のゆきとてし ちひら女
 秋ハ明て月のおさる 志満女
 川おとす川もさる 月夜女
 秋をさるの胡蝶 同
 秋をさるのさる 狸尾女
 秋をさるのさる 茂と女

水戸 演略女
 辛ノ紫 成布女
 ハニツ ちかぬ女
 采沢 宇福世女
 悠合 春え女
 悠合 春柳女
 秋のゆきとてし ちひら女
 秋ハ明て月のおさる 志満女
 川おとす川もさる 月夜女
 秋をさるの胡蝶 同
 秋をさるのさる 狸尾女
 秋をさるのさる 茂と女

新自子令佛一此遊をゆへんはり
 芳をそ此隠き家とらん小をそ山
 押のち平此後衣かくし後松乃信
 川秋の人ぬくさめる妻よこの申
 年此門止後ちよか〜後ち〜ゆ
 於〜そそ氣〜も形〜此の秋の香
 虫白く〜此歯白き戸口か那
 收きた〜この芽たち〜後す〜り
 葉此花のゆり仕業や船乃免し
 後葉あ葉〜と〜先も形を吐の菊
 本かりしもけり〜きけを静ぬり
 任捨ぬ〜ちよ〜後乃〜此の形

丁風 上サカ十次
 大雨 全系久
 阿環 舟ハ三
 不乳 上サ下三
 紫白 上サ中ト三
 豆英 秋田
 自耕
 乳 ヲワリ
 のあまゆ
 風笑
 芳武
 牧人
 芳高 モト三ヤ
 三津人 十二ハ
 月叢 河内
 金菜 京
 北斎 十二ハ
 碁老 三河
 魯月 公松
 蕉岱 相ノ米

竹陰虫遊女淋〜きた〜此奈
 風〜ともあ〜此妻〜此ハ涼
 耳や菫も〜〜〜嬉〜き四月外
 婦〜〜〜落や種妻此世並花
 芳〜ちや〜ゆ〜形手雨を字よ上
 嘗〜此鳴〜也〜し〜ち〜あ〜この日和
 亦〜の〜し〜〜削ら〜此〜り月あ奈
 妻〜このや〜原〜ア〜乃〜夕〜を引お上
 ぬ〜よ〜さ〜ら〜〜や〜〜よ〜お〜ら〜ら〜ぬ〜ち〜さ〜か〜形
 故〜ち〜芳〜ちや〜世〜を〜ぬ〜〜〜〜ぬ〜た〜を〜こ〜ら
 新自子小〜ち〜此〜葉〜ち〜か〜こ〜ら〜ゆ
 降射山や葉〜ふ〜飯屋の氣〜ら〜ゆ

丁風 上サカ十次
 大雨 全系久
 阿環 舟ハ三
 不乳 上サ下三
 紫白 上サ中ト三
 豆英 秋田
 自耕
 乳 ヲワリ
 のあまゆ
 風笑
 芳武
 牧人

門まゝやまの結しともぬ志をり
夕へ藤し柳か見えゆる小坂のち
山崎のまはりのな衾やさきし
え目や原よりしれあきあけ
葉はくくや待やらたゝ藁た門
小原女乃京へすくく雨は蠅
戸をすちやふ葉見ゆる子ゆき
まの月思ひのけぬき人乃すま
干あゝぬ蟹の白らもあき
降るは雨を待ぬまよ杉を降
けり秋は眼まかゝるなり海舟
ぬきや都を出一朝

雨考
圓之
斜月
竹馬
柳保
竹堂
栗窓
年之
雜氣
有保
英子
中之

世を捨し尼も故をりおうち
けり秋の具も新宮屋乃住長春
お柳を結しけりはけそあき
帰るもしき舞もさぬさる春はる
花のるおきり結しけりおきん
るの月もさるのま山平入り
くくくくくくくくくくくく
三つ子も何たり役なり妻の秋
朧お柳をくくすかきと勢
急栗や表りりおきとさる
まのふまそそおあたるぬ時
柴舟平しん四山くくくく月

遊泉
松才
五樓
魯月
蟬友
陶里
賈天
舟仙
暁水
春畊
文朗
級

ヲスカリ

秋

武八十舟
遠六松

尾十三ヤ
相トツカ

相クッラ

峠のつり里のあなをきく青田の形 相違 起石
 世の中ハ生鏡をさうよ自取在 木 春明
 ちんちんかかへんかきる胡蝶 常下 紫山
 ちんちんかかへんかきる胡蝶 常下 安隣
 海苔の影も流石や毒の水 無長
 價出しと牛おきせん花の山 梅月
 花のつりともせてるぬく 十六 對山
 根のつりともせてるぬく 二十 一茶
 何ぞよとせてるぬく 能久 文角
 元日も師走のぬり 季 季山
 ぬりともせてるぬく 二 二於

年々けれ目と拜むぬり 青 青路
 なく涼のわい入る 二 二木
 露粟や梅のつり 野 野鶴
 以川もたのつり 五 五明
 長閑乃た山 思 思成
 かの掃まけく 其 其成
 月影のつり 鶴 鶴老
 三のつり 志 志は女
 月影のつり 月 月影女
 夏柳や夕日 相 相違
 古池や 里 里人
 只居下 紅 紅戸
 只居下 雨 雨籟

つりしめ山の名もそはくそぞろの
雪の降山ぬきそそ霞乃小そその菊
不足つふたつらハ花々をそまよら
山松や暑さ吹さらけ年一乃貝
いろはみと人ノとトをいあ茶本はこ
兵々乃幹一禁々々ん五月雨
そのも本もこれ乃支度やまのる
夏もそまもち々一かつりそ舞瓢子
入日る急くし人のり一冬田本
まほくくや身も虫干の救々一
世を字はふさささるれり閑古を
三笠山此あつても又々々々々の月

江戸アサ
児栄

梧滴

物二

牛乳

東栄

子山

蒼石

赤子

杉枝

士徳

苔丈

素雄

野みま木 抽乃木
石志志々一 青梅満
能形一
馬少
冬
春
志
嶺
わ
と
降

占波

杉溪

一水

飛蹊

豊水

馬令

文雅

文國

以文

素白

夙夜

可宗

大々々々清一宿ヤきし牡丹かなヨク九生リウ 尤負

幅幅や兼おきおしふ伸常下タテ 茉堂

庭よりおもとのぬ自傍や花々を羽秋田 街住

美々々々一板とやうう二人あお羽秋田 羽告

転々々々一這入る柳かろ一間赤ヨクシラフキユ 文成

はみ々々れ々々一押曲らるる小ぶ赤右男 亀武

妻上らるる子毒々々ちやけて志事ひりり右男 玉扇

去々々々れ々々一さへさへるる小ぶあつぬ右男 魯竹

西月やお入の安ししれやけし右男 如翠

妻々々々日のちきき一形々々山々右男 曉山

きはららるるれれ々々一立々々るる居々々右男 流水

雨子々々う々々るる々々右男 東曉

甲々々々々々れれの花々々々羽秋田 民児

妻々々々や 家々々々一うハ修々々羽秋田 松羅

秋風はり来りし残る居る外江戸 以来

叮嚀し火を枯火く妻のあつぬ江戸 既成

はら水を送さよ押屋や村々々江戸 白嶺

ひく々々息々々々あよる々々江戸 曉月

楳々々火のさよあまや徒の死る羽大タテ 飛處

葬々々花おししももさる々々羽大タテ 五頁

か〇ちききもきか〇山々々々々々羽大タテ 素十

松々々々りりしう向き々々々々羽大タテ 圭得

ひく々々知はく々々々々々々羽大タテ 習之

隣の形々々々々々々羽大タテ 芳水

如月や 男猫とてぬ丸七は 羽大々 有桃
 業や 等閑ねとぬ蓬 餅 松戸
 見ぬうらとねとぬ日あつた春 白洲
 松竹のうらねもねとぬ春のや 黛嶺
 新のうらとぬとぬかろ小は川のみ 朝蒿
 紫陽の春のうらとぬ降のあつた日 素明
 何とぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 田旭
 かきとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 但代信 阿年
 月とぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ ハリモリ 女とぬ
 秋とぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 全二 万代雄
 かきとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 遠二 露岳
 まさなるあつたとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 江戸 曲阿

月より春半芥子芽とて語り危 相江三 松蘿
 世とぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 棠憩
 岡崎乃橋や 扇の 終の 松浦
 松竹も葉をぬりあつたとぬとぬとぬ 全平 律志
 子月とぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 全ホリ内 きのと
 老とぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 下毛カ 真遊美
 長閑さや春のうらとぬとぬとぬとぬとぬ 赤牛
 城とぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 汝上
 古白乃朽とぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 兆幡
 淋とぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 楚荏
 以上此戸もとぬとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 木子
 まさなるあつたとぬとぬとぬとぬとぬとぬ 汀月

羽接子
秋田

虫御あそび小春心くく借家あり
塗も此の風を披ん桐乃花
葦乃の沙浜も孫千の垣根の
妻もふふふおんをそ帰る厚
夕涼をぬくくくくきく田くへの
黄くくくくくくくくくくく
縹拾くくく花乃くくくくく
雛子くくくくく乃は領をくく
水海くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
里外名を訪くくくくく
くくくくくくくくくく

秋田

渭缸
潦鶯
有隣
可朝
可琴
聞之
可涼
可聚
圭我
のひ
可扇
里曉

美竹くくくくくくくくく
六月美人休ませる林かき申
その戸や其日し乃改まり子
花のくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

松栗
素考
汀松
雪鮮
路川
可山
舟水
霞曉
可賞
可圭
素人
青章

晴るるこ海をわたりぬく志をこたり
 ぬれぬる此情は流るや秋は子鳥
 海老たりの扇のふりやうり霞を
 蟹踏むるまをりりまをよるなり
 門かすむ棋や柳一乃あまをさそ
 須磨まよりのつらも嬉しきの月
 去る雲は北窓宿をとる扇の形
 経路のふゆの起るや池の雨
 暮年まねわくハ子鳥をたし海を
 かきつりてこ此情を流るは流る
 潮とさなるや鳴戸のわたり
 梅うまやさしおんこり戸一枚

秋田 文雄
 岐陽
 渭翠
 之玄
 上毛ニッダ 島雙
 全田エキ 玉笑
 下サテウミ 桂九
 了八千三 李長
 飛堂
 氏古
 里雀
 梅州

夕川くるととくつりまや海を計
 青雲をまねたたりと一巻の形
 夕夜やそ秋のおもくはふりかえる
 雨古も流るや日負は葉蒼む
 松風をりし流るはけそ秋の明し
 小くくくよんてのふりしきの水
 霞の秋見のや雀もちかめはく
 木食力宿るを瘦るり木下園
 翁の流る二本もくは片流す親
 高くと徑よむまたり翁の流る
 美しうむや松のさちしハ月ハ月
 鳴ちりり二流流るを秋の解る

江戸 鶯笠
 下セキ 羅風
 江戸 岸居
 重久
 起雲
 桐堂
 寒柴
 太賢
 緩駕
 亀双
 耕六
 和龍

○木曾路ハ谷原く山嶺送身之道知つを頼より
 お子他より形く様の哀ハいふとも形を先推し
 子吟詠したるや来る所推くき世の人乃土着哉
 空りはきく又士朗ハ竟改年仕る家 後の事
 婦人やくまゝに孫臨ひて留の落子福笑子招か
 一時陽後子赴年家結多きよ本その夕涼を
 吟し予う古にちま架、消息を託さくも今ハ
 一昔とは事ぬむに御料のそむるハ本以の既高
 金々舎あゆの周よ悲折しも玉蕉産く人坐
 志にく情更く四海向双紙を讀み連さる
 瀧旁新暑く千かこく字を案在味 木芳 洲香
 水白千 和ハぬくよりハ花幸夷 秋田 秋戸

夜を水ノ流とそそ夜乃知さく
 川あり馬追ひつるや夏乃月 工原山 金馬
 起くそそ新たつて丹に かしらと
 隙きてハあゝあやうありまは
 葉のそ花や眼を流しくも涙之の海 棟梧
 葉のそ花にけり詠ある夕日かく 全ニホ山 湖松
 青柳や々々年も庭のせ高かく 全ニホ山 之祐
 一人は去りや更けりすむし甚 因山
 空の梅や炭火乃おさる木の音 百歩
 空の庵より石ひけりあや系すまき 寸風
 空の 扇よりほきくしそハるまはれ 弓月
 福境や燕巢をくく粥を煮る 邦三

此の終ハ鳥帽子さよりり夜取り
ちりりと降ハ空をちりりさの月
まゆ子おささおさささるや和田崎
とれおの甚振まらふくやまのり
精探さくさ川くもささ冷しけ
るの投るるははへ年おり系外
川水の底くもあさやかきささ
木かりしお吹もさささ一乃松
おの布くおさや振さの部公
まのまのまさささのひさささ
芳さの中様さのさお娘乃子
人よはく條さありおさりさかお

但方歌子

如雷

全千系

月波

全三廿

四暢

藍尾

鞠居

花嘯

其卯

全然谷

一甫

全味那

吳柳

川掃子

仕候

相千冬

吳水

鯉仙

鷺の頭乃たのちや一りり斤勢
きしお吹るやまさささり月乃丘
覺ゆや松一引さる朝乃松
まのまの世一まのまも催可一甫
さささささささささ水乃月
おのさささささささささささ
家建了噺一そ片お納涼亦
笑さの代終も回一まのまのま
さの笛お小まのまかほおおかお
まのまのま一まのまのまの月
雨晴お人よかささささささ
まのまのまおのまのまの日や雲の峰

玉川

菊雄

三千雄

文好

其扇

梅記

可諷

船里

扇之

左松

龜泉

石泉

入相乃い毎々一々子規か事

羽う言

三甫

雨も秋乃形もささきとほしし船のむ

山花

白梅の咲く日もささきも形もささき

梅嶺

山もささきの咲くてこらや三日の月

渭貞

おーいさかお早しきまかり事

羽十二処

古瓢

常々おささきも形もささき世界うり

其栄

扉校乃るや小鴨のけりいさか

全洞山

君山

月もささきもささきもささき

東野

才秋おささきもささきもささき

藍々

却ーいさかお早しきまかり事

全吉人

月道

塔おささきもささきもささき

文之

ささきもささきもささきもささき

壬午六月町

松汀

鴨一相乃い毎々一々子規か事

全吉人

志げ

ささきもささきもささきもささき

全吉人

松居

門乃いさかお早しきまかり事

ウツミヤ

天塊

常々おささきもささきもささき

棟高

蹴合おささきもささきもささき

東籬

山陰や家十たかり 風巾ひさし

暁鳥

ちりはくささきもささきもささき

兎白

藤おささきもささきもささき

武三平

東雀

紗ちりも肩よりささきもささき

全

山吹や袖千し川せう字はの山

庭翁

夕白乃いさかお早しきまかり事

全吉川

柳志

経乃いさかお早しきまかり事

壬午水奈

空栢

けりてまゝに生くかひりあふ子のけ イセ上野宿 紫酉
 五月雨や降はくけりの夕あつて 雲子
 けりてまゝに見上る形智の山かゝり 裕之
 まゝにまゝにわなを考へて用子を 全徳寺 木精
 岸椒冷くてもあつてり五月雨 全徳寺 箒村
 菊のまゝや垣をまゝにわな 江戸芝 斗口
 五月雨よりありと生く小雨降 ヨククミ 東嶺
 まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに 津軽 吳舩
 さらぬおれをわなを引むわな 信州七川 桂裡
 那川かきおて山ちりま川 信州七川 里川
 まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに 信州七川 五柳

清く濃く水は濁りを新にそ 信大川 竹雄
 原くまゝにまゝにまゝにまゝに 今川村 千兮
 まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに 千手水 千峯
 凍解やまゝにまゝにまゝにまゝに 大安寺 蓬仙
 卯のまゝにまゝにまゝにまゝに 大安寺 東峩
 卯のまゝにまゝにまゝにまゝに 大安寺 青蒲
 朝まゝにまゝにまゝにまゝに 下流川 文冲
 菊まゝにまゝにまゝにまゝに 下流川 菱里
 間隔まゝにまゝにまゝにまゝに 下流川 有三
 終まゝにまゝにまゝにまゝに 大連寺 此君
 橋のまゝにまゝにまゝにまゝに 大連寺 花生
 起しやまゝにまゝにまゝにまゝに 大連寺 伊文

己の寸さゝぬ人もあぢり 梅の花 平ヨホウ
 るらりのく葉あふりあふれまきくはし
 山吹のよはれそりりくうらひさい子
 神のさへ海を秋よあまこり清華の宴
 さるるにけし言やちんと綱をけき
 短もかゝくくく免のはかたこの水
 名月も海を尺を秋乃秋の指か車
 根を梳るきりく秋の指か車
 その戸ハおくきとせよるり月
 は海くし橋を接りありし車
 探さるらや水多ありきたるあふ
 吾宿らまき田を流もつるるりり

、サトウ 田越花
、寺社村 此紅
、探原 探原
、終極モト 観古
 古樂
 花由
 松琴
 青杉
 芝英
 生駒

朝夕よりやはくくく其まはくくか形
 明けりやねりかゝくく花りる序
 細代より小舟はちくや吹さるの秋
 園の枝葉さるるくく笑くくくま
 花よりさるるをりや牛はあひ
 山寺りかゝるあゝぬらん子 香
 積岸や馬啼ききり 花 蕭くし
 老らるる其葉くくくくくまよりり
 赤くくくくくくくく 初日の秋
 ひらりくくも花舟も其花れくくく
 秋のけし柳の影をくくくくくく
 其花香りりりりりりりりりりりり

、雀子更 雀芝
、田良 露頂
、内田 柳枝
 如泥
 方壺
 岷山
 篁八
 蛇毛
 其然
 鷺一
 其秀
 秋鬼

水鏡 啼一門 驚こふは花をまは 北洋
 交免くや 只ぬれいろの山くや 旭浪
 眠らすよ 長をこもて せつ力せつる形や 生
 夜乃松くくしきけそ 梅有
 涼一さや 二本とも 形手くま川の陰 下野田 归来
 名目もみちを 渡るさく 江の形 三子 南裔
 美一きりふ 井姥末や けしけの 吉木 麟二
 原の柳 念佛く 登りま 乃り安 水戸 規外
 ねくきく 江流く かくや 筆の けそ フクニル 朴高
 長閑さく 余りそ 登る 雲か南 只人
 障止る 以よ 空く 止るの 雲高
 風止る しの 淋く 鳴る 鬼卯

鏡中 水の中 湖中
 氷る名も ぼくく 登る 杜年
 夕の 中や 荏壳 再可
 左乙 泥る 猪三
 好ちる 世を 安を 古六
 山 山 美曲
 春草 冷 其相
 八橋 紫石
 古彦

潮をのさそし月をたさるる暇の裾 水戸 低我
 さらのおや海うらうら明く暮るは星 低歩
 多水月日の暮るきかちりや不二の峰 緩歩
 ありてきけちやうそきけハ遠きまを 越後 二竜
 志かゆや外山の月平ゆり向き 李青
 は飛まきこま梅はさうらと花の笛 野拍
 雲の峰一帯くともおろく起りて雲 玉之
 女も若老まけしなる甲ののち ちのち
 いろしき名をまよふ先まのきと花 魚曆
 思ひ傷をいふ酔もまよふ虎のる 野松
 あゝ海よもせよお秋のりあま 恒守
 子福者の門に鬼灯を照らすはく 有石

経をたやそあけお月とふ人 佳笑
 雨おのをも二氣ほかせたり 如淵
 花実まきや路の山月も古く飛 若水
 少くおふるはくこくし梅はさ 勸里
 園のかここや 鏡りしおおの 風泉
 多枯る竹も露けき月花を 玉珂
 鳩鳩ありひくき秋とわりの 秃山
 志まうくハはくくく埋む小 池考
 扇尾まをあかり他人よま 夢南
 風やまのりぬ山く路 蕉窓
 けまや花をまきく山乃町 楮山
 布くきけきも水のそ 竹邨

武クラキ
ヒメキ
ヨクニル
宋依
ヨクシキ
全南白
ヨクキ

布々々々に啼くはけても筆はまゝ
常山 眠石
 山住のまや庭——見きり通る
 和
 此目乃る白く急出うして啼けけ
 山子
 此の夜も寝てはくもくや夕下し
 柳枝
 何れ世もかん古きもくく啼ぬ里
 寿水
 葉を——禁日——胡蝶の多きころ
全三 柳雪
 白鴉もかきく月乃る宵の南
 露半
 春風やと吹くささく小笠本さけ
全小田 壺仙
 何奴り馬渡くくさき川もさき
全五ウラ 眠花
 何れもはくもかきかけさき芒の形
 万磨
 此の柳もはくをばくさきさきさき
全五枚更 来一

松乃る走んばくく乃るあたり
全三 眠茶
 此のなるとすりともくゆり
 眠水
 細き入魚さきり出さきり
一十八 一定
 此か——さきさきさきさき
 孤
 此月や里へ押出さき山
武クラキ 野松
 田乃る急乃るのさきさき
 蘭朝
 猫乃る暇もくねや牡丹のとり
ナラハ 朶曉
 日乃る向ふ車よかはけし
遠カキ 茂松亭
 此のさきさきさきさき
全中泉 李州
 此の柳乃るさきさきさき
下内山 子峯
 ひりり白よさきさきさき
カヒ 可門
 夕寂や此の苑のさきさき
 露菴

羨れ春もも葉をふきそふ春睡月
 破春のつゝ風半のや女月や
 六月や小あふふとを竹 乃光
 大松や一うらほもうと一かこり
 松風かろろ一うらほをうらほ
 ねよ目おとらろりはそし山わ
 かひのまろ一うらほをうらほ
 水と日をものせそ屋ろや藤川舟
 ねろろ戸一かき一うらほをうらほ
 秋のねやまのねろろ屋ろはね
 ねろろはは葉おとそとせより
 雨とねろろはねろろ屋ろはね

田州
 村之
 奔止
 一有
 宋真
 好三
 嘴雀
 枕流
 由己
 猪睡
 尺寵
 湖水
 青荷
 伯品
 武クラキ

わらろろも春お春の五十春
 ねろろまろろ雲れねろろはね
 雑炊て半ろろあそろろ秋のね
 何もろろ以ねろろも春のまろろ
 ははねろろれろろろ一合を時ろろ
 白本ねろろ一相おはねろろ夕アろろ
 るのりや玉苗ねろろそろろはね
 片里やまろろろろろろろろろろ
 鞍馬れろろろろ一男を雛かろろ
 日れねのかろろろろろろろろろろ
 四は見れろろろろろろろろろろ
 相おろろろろろろろろろろろろ

ヲクニハル
 酣漢
 春嶽
 太し
 古道
 九一
 楊こ
 十春
 宜明
 勿言
 一成
 白瑛
 素月

三春 俳佛
 梅 如髮
 更衣 出仍確
 戸 和節
 梅 半岱
 鴨 史十
 本 氷水
 灯 水
 有 奇淵
 中 長齋
 月 茶靜
 此 憐乃

三春
 丁イッ
 江戸
 河内
 十六
 江戸
 江戸
 江戸

連句之部

後 仙舟
 掛 龜丸
 栗 文瑤
 火 乙二
 茶 松徑
 子 二
 枝 九
 結 九

仙舟
 羽宋に
 白石
 乙二
 松徑
 文瑤
 龜丸
 九
 二
 九

被はくしぬくくくくくくくく
 七夕ほくくくくくくくく
 古風くくくくくくくく
 蓬の寒冷くくくくくく
 幸きくくくくくくくく
 とくくくくくくくく
 頬白くくくくくくくく
 つくくくくくくくく

徑二
 路九
 二徑
 松化
 孤

月院社臨時畫題

風のちき日とくくくくく
 岩組むくくくくく
 新遠きくくくくく

何丸
 斗石
 子郷

信州吉連

望ぬく男何くくくく
 空まきくくくくく
 あくくくくくく
 艾切くくくくく
 人魂くくくくく
 小若くくくくく
 ぢんぼくくくく
 卯まくくくく
 村くくくく
 赤きくくく
 月日くくく
 をのくくく

魯川
 花僊
 郷石
 九川
 僊郷
 石僊
 川石
 石

や、柝子より長明の杖
西東の車一棧押歩り
笑くへい清く暮のかきり

孟夏整脚菴奥行

水もよや命月も早くて懸ぬ系
改きり 柳川 流り 里
有葉あまるも涼き一出さかり
雑魚ひくはうに見せるとりひ
そめれ後口たりる氣さ 外
降ふきよく 白ふ 木 庫
乙をひくはうにおしむき
ひの魚り けくを 備え

郷川 儂

村之

月居

千崖

木海

之海

之海

之海

之海

因州 懐花 京 行脚

嬉——さよふ田の水を看る——
増かすみふ屋よさの 4と子
定片のきやうよりありぬさる
ふの如時計のやもそ并り
大あも出さぬもさるれ
燦りの日お——是代衣の表干
依保姫をおくし歌くかた
磯より波き——はらと
秋古ふ社の月をるか
廊下口留くしみのん

之 之 之 之 之 之 之 之 之 之

春日蜀山堂清奥

晴とよきふ旅ちきもたまきと見えけ
まらち歩りし 曇るそのの枝
暖よりし 土の埃をよこしん
雨り中 飛る 未だれまをあげ
才あり 終れおきよきききし
練乃ちうちも海をききし
藤幸に念佛す 女子連きき
又も呷り 土をまき 多く中
木枕乃 垢すて 暑き一筆り
雪乃 魚を片 石何はりけり
古歌 今せむ 君の心を取く

信不

主人

行所

素架 洲香 北尼 全 海香 全 水尼 全 海香 全

身をきき 霞とたつて 霞に目せ秋
きぬ川 袖平 かつ 山 暮
稲妻よ 揚る 松の影くく
瀧はし 一 下り 水 谷の入口
尾さき 一 毛を 杖を 杖を 杖を
おと 篇を 一 おと 雨を 雨を
ま 日 本 飛 鳴 言 一 即 ち 予

そのよや ちのけり 一 乃 面 白
小 雉 乃 ち 多 一 毛 何 一 乃 先
かき 一 毛 何 一 乃 一 所 一 写 一 予
二 日 一 毛 何 一 乃 一 毛 一 乃
古 佐 日 記 形 一 乃 出 一 乃 一 秋 一 乃 月

下毛廿四

水尼 海香 全 北尼 全 海香 全 水尼 全 海香 全

吾のけりをたのむる 務りなり 体は
けりし 今せむ 志のし 心を取く
水尼 全

ひのちのちるさき——明後り
おやくと橋舟を押し——
四十の形終と嫁——
平内り石子牛舁りも悲なる
ひら——時をせよ——
千ふらるとハ梯を本下園
強合肩力り世子長と呼ばれ
白雲を橋浦舟棚子採らるら
風力り春たうのそら月影
草若れけ冷さるる年り
さきり佛——おきり終る
草きりはらうハやまき散るはら

鬼園

全

表

全

鬼園

全

表

島

椿

年

年

明

全

四季昔句部

ふらぬ天々——まきとるの片時
は——りよぬを乾け露の並ひ危
蛤吐吸むおきる——海りり油
ちりまきとる散るとおもひぬらう
霞子まきとる本槿りさのひら
釣鉈お勝はらも月おのね
山子や端もさるひもさおのちり
芥菜や目——あ——名をさす
菜の花や新田村とねもさ終
菜おれまの中とあや——おろ
おせらるるおれり——おきら

ツ見外

乙丸

ヒメキ

周泉

何丸

世竹

玉之

石羊

イセ

女高

從周

木の上

鳥溪

如葉

櫛此かゝるあをまやひはかきくは
 江戸 みる
 人泊る一早こ甘味や下瀬千本
 啓山
 傾城子やくくくくくくくくく
 大夕
 山の井好之成まてし後や蝶のさる
 吉田
 知るれ候りしと形や根うし子
 自耕
 十後盤此らうこそ定々やらあのみ
 尚故
 家毎子内きくくくくくくくく
 子文
 みまははの北へひくくや閑子も
 江戸
 桑敷しと幸しと出まきり後と櫛
 湖翠
 船自かひりしと候も秋しりまは
 一の
 子り向く白くくくくくくくく
 文好
 人よとく候折きくくくくくく
 朗明

鴈鳴くくくく押車くくくく日知春
 巴蜀
 以非かやくちり系毎はほくくく
 江戸 義郎
 危ぬけやくくくくくくくく打延く
 峯梅
 衣洗子持美くくくくくくく川
 可笑
 分あもぬくくくくくくくくくく
 全
 遠山は浪力きくくくくくくく
 四
 遠山は浪力きくくくくくくく
 四
 是やたの垂くくくくくくくく
 藍尾
 あく海お上くも阿くや秋のさ
 鞠居

白やしろの茅葉ももつは露もつは
村をくちかかきくちくちりり時を
卯の花は垣根を二日月
夕は終りやうろをぬくは露の月
夕はひよ花は終り梅や中つ涼を
隣り花はあや紅葉花は影いそそ
以花のめや田舎をうぬハなとま
湖は果らうらうらとる牛もたち
目生もこハ梅ももさつおのさつ
ちがさくは二やあふさの柳たち物
長きおきさあふ伴ふ垣根を
治まらうははてさけは梅もさき

乙二 斗石 子郷 宗有 曾丈 文雅 房 梅里 三十一 武日 十六 乙彦 伊ッ信 一 瓢 寛兆

あきかきくちん昇はくちん新たり葉
江戸 有鱗

大竹の竹口あけくちりまをさ雨
衣重

妻の巻や八百屋の女男はもよ飛了
全

日本各地の猿蓑かきくちん

七夕の女あつもさつはくちんおあはせ 古吳人 鄒静岩

あきくちん日本をささきくちん

あつとくはかかきくちんあやあやあやの手 劉雲臺

あつとくはかかきくちんあやあやあやの手
あつとくはかかきくちんあやあやあやの手
あつとくはかかきくちんあやあやあやの手
あつとくはかかきくちんあやあやあやの手
あつとくはかかきくちんあやあやあやの手
あつとくはかかきくちんあやあやあやの手

冬もくも命者定解のほろむと不さるゝあまう
しりあやしいさう其れあきもあまう

早霜れ中一見さくも人も名跡あり

水多れ歌や出るれ寒くありる

朝ねもふけよ其芽れ様さく後

七夕やわづらふとへ夕々しき

松の枝れ寂け出るれ火桶の形

秋立ぬれあきの多き節のよもいし

若きや一着もたたくと留徳の色

波静し月研るれおろし氷かき

秋の土相れ水もきとや也のそ

牡丹咲き眼よかきとあまのそ

己らきとあまのそあまのそ

並美

秀保

喜坡

露江

百彦

松畝

其孫

全

互友

一窗

風笑

若きとあまのそ起さるる様

名目やくせよ扇をかきり君

稀美子一小綴とさるる遊色

猿啼きとさるる霞の杖かき

芒芥さく月夜とさるる小かき

左義吉や月も様り下へる小

兎乃と瓜もさるる遠り危

白芥子や赤新様と朝の後

傘はしと園と出たりとさるる

夢そさるるさるるあまのそ

あまのそあまのそ様とさるる

あまのそあまのそあまのそ

文貫

全

芳武

全

魚村

仙峩

全

石棧

李州

全

義らや

名彦

三日月一形名や牡丹氣子部
さり大やとやまほしむ鶴のかさ
山のや路くくこのころは路の
その戸乃そのれりなりはた風
踊るころまきさるるるるるる
花も実もおちる路くくおまの
おちるるるしかりるるるるる
母のおや路りおちるるるるる
嬌栗とととがからや男の子
此の路るるるるるるるるる
十日やゆもくかほ日和 虹
名はらとととととととととと

松本ヨシテ

下サ

夕ニ

戸カ

秋田

布席 鶴老 司科 太山 三厚 麥之 羽揚 全 蓋屋 文成 世竹 吐心

ありくく入目よまじり 厚衣服
ちるすおれまふるるるるる
くちくちくくくくくくくくく
鳴るるるるるるるるるるる
四羅もれくくおのめくくくく
浅る山まれかよる路の路
るるるるるるるるるるるる
おちるれりや健康一蘇りりり
冬すもますきハるるるるる
おちるれりやとやまほしむ
りるるるるるるるるるるる
冬くくくくくくくくくくく

房州

全々山

江戸芝

クキ

白年 梅拳 冬深 守村 白草 東之 桂羅 一本 石羊 信丸 顧笑 松江

~~~~~の水ささくは釣る持のつらこ  
風よらつてきつてもあつてい

松葉やとよむ名も清く早くは

新白くもつらつて霞のそけいハコト

七重八重なるけけけ名はつこの水

字の如くささくも見ややまの山

岸のきもほく傍るまきり 跡のせり

是れとようけりて岸の日の加か

秋の減るもささく新白のひもはく

吟さしりも後さすもや新しき

ささく霞とささくはつめくし

小多し山よ負せくく名のつり

捨るなりはれものこのハ若れ

みらる

目

萩林

杜園

葵兆

文董

咫雲

ゆのみ

汶上

赤牛

律志

秋田

巴陵

三千ノ

一水

豊水

馬令

文園

緑帰

雨籟

砂明

玄蛙

若雨

野英

野英

くりくと雲を海や畦の人

ささく新かひりもおのを

く終竹の三根を二根ささくの月

待るるハキく月又ハあけやけし

ささく四又ハささり秋たるも

おもむかひ早き秋の戸のひつこ

秋二日ともや新白のそこの

おもむかひも秋もあさく

あさくハ追くも水ハ中

校るるも葉あさくハ柿ハか

秋きめくハささくハ山ハささく

西りハ世もかきささくハ山

東都

江戸アタリ山

アキヒロニ

たらしし 窓に梅の影も 白き月影の空  
子供あふふらふ 鳴けよ 暮れぬ音  
あもよき ねくく 花の海より舟  
續くたけは 雨にまき 白うね  
まらきき おもひ ねくく 閑子とる  
柴火戸や けり けり けり けり  
あも仙や 暮らけり けり けり けり  
里よりかき 日和よき けり 梅乃花  
まら梅の 花能き けり けり けり  
傘をさして ねくく 出さけり ねくく 月  
さつさつ ねくく ねくく ねくく ねくく  
出さけり ねくく ねくく ねくく ねくく

エリヤ  
クレス  
ツタ外  
ヨク白石  
九葉  
双鳥  
白珂  
春英  
太呂  
野場  
盤石  
祗山  
梅價  
沙香  
回  
とん

夕白や ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく  
ねくく ねくく ねくく ねくく ねくく

下タテ  
仙我  
回  
對竹  
渭缸  
永糸  
里丸  
自耕  
眉長  
如氷  
昌曉  
茂推  
魯川

三月とてふより情む日暮の如  
 花傳  
 梨月  
 曾人  
 辨地  
 菜叟  
 佐人  
 玉芝  
 湖翠  
 木老  
 可  
 朗明

七千

甲府

リ錦

ぬア二

リ錦

ぬア二

京

雪雄  
 一窗  
 風笑  
 文  
 芳武  
 一桑  
 牧人  
 葛三  
 稻長  
 春耕  
 芝山

長サキ

リ錦

サカ三

江戸



あふれ  
たて

まろくは上ともつては原はるく

杉長

るの月世れおるもわぬくりなま

朶明

りしり多子給るせりり田らさる飯

文角

磯吟れ多へぬ麻さあよおれらさき

梅喜

竹枝の吟

組整る梅——美和布子亡る子

何丸

おれ多子白ひるせ——雀の形

太節

るよなぼるは果れれるのうき世分

九朴

おろきあふるし——華へてちるもこの人

巴陵

経る招き送るよりえらくおのうや

十竹

降さ——そりりりやまれ月

序礼

枝のまらそきよりほまをかやあそ

兼船

簾乃あれたれ終るきよ遊ふこころき

竹里

制れとあなめきりあそきり

桃柯

と川給るるるるもそおれり

彩雅

うき世のわ負よたあるまるとこ

全

五月もや終る仇人の教る——入

兌佛

夕るおろみと形ゆらまああれ知

同

卯おあれら病しきう袖は流るり

成蹊

友よせん美の子そ踏免て干葉吟

同

牛は那く本はるけくるとんよあ

一色

ふ川もくく川もおさくく

同

堪吟おはつしとりおれり山

半鬼

あふるそそおれり思ふ——まきり

同

此家も兼を干しるまう

文郷

り併

下サマシ

江戸

三千ノク

武野燭

河内

り併

ツクニ

末松山

江戸

ヒニコ

イハ

三木

尺八

涼玉和や人をとびしけ後多し  
上ツ廿大糸 秋筈

杭くくハあれ産つる正色を成  
カ 玉之 同

夕々し根方づく秋の時る哉  
宋 五峯 同

念佛し〜信と〜を子茹の戸  
全 露牛 同

根人死扇置りりしる事  
全 山水 同

毒折や小く〜お朝日  
全 松径 同

念願此花落ら水も散日この形  
全 同

き〜〜おちり分おす〜辛夷外  
全 同

名をばけ〜見〜花二月の山を即  
全 同

柄抄井の〜お流さおき〜  
全 同

ほ〜を〜水葉おちり落月夜  
全 同

神お〜〜お中お松かろほ〜  
アサカ 睦之 同

依〜〜お〜〜  
本官 芳高 同

遊佛〜〜見〜や〜母ら〜  
米沢 乙顔 同

ゆ〜〜〜お〜〜お〜  
全 乙場 同

研川〜〜〜お〜  
全 古叟 同

傘〜〜お〜〜果や〜  
全 同

祝日ハ〜〜〜お〜〜  
全 同

あ〜〜お〜〜お〜  
全 同

お〜〜お〜〜お〜  
全 同

湖〜〜お〜〜お〜  
全 同

お〜〜お〜〜お〜  
全 同

あすは花ももをりしを穿せよきりか  
 江戸 陶里  
 月の夜は初の花の影も似てあか  
 下毛 桃明 全  
 白露はさきかきしりりりかき  
 木ッ 春明 全  
 今酒ハしつせよ先毒か山  
 二日持てく免のるもと鳴き免  
 枯木さく白ふやしくす乃雨  
 下夕テ 紫山 全  
 揮くさや一揮ぬさやそさる母  
 久苗米 思成 全  
 五月事し其をさきよる俵物  
 吟か歌や日和の影もそせ吟  
 葉白やふくまを並ふ調の鼻  
 江戸 茶静 全  
 子る危や樂しむ教の垣刈吟  
 唐よりしりりり忘る夕の影

日く出ぬす喜う起ぬる松なり歌  
 仙基 士由  
 松揺り雪りよ飛るやしく舞る  
 全ラミ 士竜  
 大川さきははやくは果報さ  
 全モ生 干必  
 布くゆき遠きすおのきり山  
 全井大貞 梅一  
 子まをぬく児美し揚るそ  
 松葉もへりて虫此さるるの影  
 暁山  
 鼻は二粒鳴りたり一彼岸空  
 柳雪  
 ささやや路は小松し一野橋  
 里雄  
 能たるも銘し飛る白やさあはる  
 全東山 万年  
 形川かき昨白は日和山さる  
 東嶺  
 尾草もくけたりや柳か飛  
 梅男  
 岡古も形くや波りし麦畑  
 乃十

ありのりお月おとろけり水鏡  
仙居山 富泉  
 松路  
全元吉 如水  
 桂舟  
クニメ 思来  
丁キ女 療鸞  
 何丸  
甲斐 六年  
チハリ 東陽  
 梅價  
相アツ木 薰岱

片山を猿のまゝあつて用たる  
但る 可笑  
 ちんちん月の出る方山宿し  
 尾寺や牡丹笑つて心をもす  
 傳つてきつた屋の牡丹よさるを  
 略つて川やふるまふ水に際  
 夜をわづらひ遠る細代舟  
 いかぬ海ある海舟をりたる  
 糸の回やまゝに外よおとせ  
 知れぬ花よは清水に汲まゝ  
 柳やまゝのやまゝなり啼く蛙  
羽大子 朝蒿  
 朝市よ霞かきつてのりか  
 層風雪のりりかきつて花

素明  
 月  
 朝蒿  
 吳柳  
 同  
 藍尾  
 同  
 四暢  
 同  
 月波  
 同  
 可笑

柴舟もくき世をくわたりし秋なり  
羽々々々 吳水

言りし言らざる月形なりなるまこと  
同

おのほの月夜を余るはくはくの家  
三千碓

卯此美や嵐乃色ハ夜ナリ 癖  
同

と一阿ハ一花のくハハハ浮世の如  
文好

年一まらぬ海よまらぬ田一ハ一南  
同

新起や十も形一ハ梅十日  
秋田 濼鷺

物つくは移しをきくハ九日お  
同

如月や少くはつ角一ハ一水乃垢  
舟水

そのお戸のそのお色ハハハハハハ  
同

美一ハ一老れ歌や一海苔の味  
之玄

夕新の昔一経一ハ一海乃るま  
同

と川一やらお抄乃美先ハ細きも此  
三ツリ 魚淵

萩もくくくくくくハハハハハハハハハハ  
リ柳 万外

秋の和やかハ一秋もあつそ二枚交  
文角

おらりも又お海かけとや鳴り子音  
ハハハ 蛙井

るの月たつとくハハハハハハハハハハ  
イセ 聖川

人たも赤人もきくハハハハハハハハハハ  
何丸

お志くお知乃ハハハハハハハハハハハハ  
十二ハ 井眉

おきりおらるハハハハハハハハハハハハ  
イセ 井保

妻何やあつとくも人おきと形ハハハハ  
江戸 松雄

悠々川一と秋ハハハハハハハハハハハハ  
伊文

わおハハハハハハハハハハハハハハハハ  
はら梅

おあつとくハハハハハハハハハハハハハハ  
あき鴨

題一圓窓之圖

誰やらうらさうらうらなり秋の月

絶句

誠拙

静坐對青山

ふらふらの三竅あやうし閑古き

言碧山

石門

岸に静けり小所もききさゆし

八丈

孤雲

人の名を清くはくし静し昔より花

全佳

如月

佛まゝもひさしをわくやあゝ手は

京

春水

せうくを水は都なりあゝ静けり

お上

湖波

あゝみの片隅くくた踊りの如

下つ

露時雨

突如より列形すや 録 船

高橋はは風をわく静しちとま

田路寺

知るやいささうらうら公の

了千

芦汀

午時はハ静けり世のくく小淋や

正午

深原

あゝ見よ一帯あゝ静けり

此江

黒くもやあゝ静けりあゝ静けり

此江

あちあちのあやも静けりあゝ静けり

あちあちのあやも静けりあゝ静けり

白けあゝ静けりあゝ静けり

蓬拙

静けりあゝ静けりあゝ静けり

ツカ

里川

押しあゝ静けりあゝ静けり

里川

三井寺の静けりあゝ静けり

三井

崔芝

夕くらみあゝ静けりあゝ静けり

崔芝

あゝの月静けりあゝ静けり

方壺

扇さけらるる折一とある茶葉賣  
紫陽花あかハハ川と同一  
と川一葉苦も不しく甘子も菓子  
鍋かけく嬉も出たり秋のつる  
せくはあそよはあそよけり録しり  
六月お人あそよけり録しり  
お白くお世をさそよけり録しり  
おんさそよはあそよけり録しり  
山はらけらるるれ夕日お白のぬ  
と食をそよあそよけり録しり  
そののそよもあそよけり録しり  
初るあそよけり録しり

水戸 規外

三妻 其秀 回

甲の 村之 回

李州 回

信赤沼 蝶撰

武四沼 序禮

浪路サ 龜齡

兵藏

墨吉あそよけり録しり

イ十八 雷師

花さそよけり録しり

金鳥

ウチあそよけり録しり

南嶺

小京あそよけり録しり

紫岳

あそよけり録しり

南溟

川あそよけり録しり

湖流

あそよけり録しり

唯鵲

あそよけり録しり

淇村

あそよけり録しり

梅人

あそよけり録しり

直笑

あそよけり録しり

渡風

あそよけり録しり

荻雄

常水北

探さるる白くはさしなりなるみ山  
 鈴白くはささるり又はし天の川  
 世よ世よは鳥豊乃新や故喰ひる  
 ちよちよもあこころをさるる梅の花  
 水新鳴く中よ一帯ノ花をさるる  
 湖や鳴もあこころのめも帰るる  
 夕陽のほしるる年一はく終るる  
 春よ一あさ梅をさるる花はく終  
 日よ山よはくはく維子終るる  
 春静よ一あさ休あかりすけの  
 か一帯一や新の根竹の長短  
 山花も柳よ一あささこみとり  
 甲府 曾人  
 正亮改 ちう丸  
 常平今 曉鳥  
 一六 大藝  
 采真  
 好三  
 冲  
 文居  
 竹麿  
 天語  
 六蔽  
 窺天

人春ののちく終るるよあこころの  
 一日も雨をさるる終るるさるる  
 夕よよよ一あさ梅をさるる花はく  
 秋風とあさやあつこの門乃子  
 四けやとととと梅をさるる花はく  
 あつこの花はくはくはくはくはく  
 柳のうら柳のうら遠年をさるる  
 紅梅をさるる花はくはくはくはく  
 春風やうら矢よ狭よあさるる  
 夕陽のほしるる年一はく終るる  
 朝鳥よはくはくはくはくはくはく  
 梅やるはくはくはくはくはくはく  
 無三  
 端水  
 大乙  
 采雅  
 蘇中  
 金羅  
 田美  
 警一  
 松魚  
 兄嗣  
 融舟  
 似山

西遊大ミツ  
 下子押砂  
 フクニハル



わささささささささささささささささささささささ  
見たりりのんふ智の浦辺に初  
御ありまよふ魚をておまや二河星  
馬車くかたお中乃ひる故きり  
枯れぬよりけり人のこやひいとゆく  
細代守月見ら斗くく屋浦  
海舟をさるるまで花の夕この水  
鳴る勢はさささささささささささ  
二月後の縁き月おそかつり花  
海舟をももて座より近よるさささ  
鳴る引秋の虫をさささささささ  
おさ自ら一遊列くる柳ののり

三春

掬明

ヨワリ

松人

秋田

賈天

秋田

南山

秋田

後周

秋田

眉長

羽舟

自耕

山

可貞

山

以綿保

山

文雲

秋田

五葉

かハせこれのりあさささささ柳水  
馬はささく門ささ小さささ木槿  
さささささささ根多をさささ  
おのりささささささささささ  
吉はさやサササ柳さかん古とさ  
扉余てさささささささささ  
水さぬさささ川さささささ  
さささささと白サササササ  
ささささのほさささ水乃さ  
後波さささ早苗ささささ  
大雪さささ山もねさささ  
ささささも祥あもさささ

秋田

其竜

山

以さみ

江戸

峯梅

江戸

義郎

ヨワリ

乳

江戸

全

江戸

衣重

江戸

のさ

千本松

車藤

千本松

山暁

三千ノク

彩雅

降しぬきそくや日影の糸くもり  
馬しんたよ袖おもきろきそ乃る  
ひ川をうて見うや柳の枝ハほき  
傘よるかれまきそ二月しの節  
風をこの帯と思ひぬ里を枯尾花  
暖をわくくはる並ふ田くかか  
松おしりけさの門乃妙妙妙  
稲妻お出たてまは板の妙  
不二見ゆは糸やうまきま  
五月のにおおのりくはる水川  
花のゆきを懐くうまか令経  
阿波船乃のりきそそそそそ

コナ

都崔

イナ

兌佛

イナ

南嶺

イナ

崔居

イナ

吳江

イナ

桃宇

イナ

竹室

イナ

鼎

イナ

巖岳

イナ

季福

イナ

曙堂

イナ

野楊

風やきけくむはるくは遠あつくと  
九龍灘を教泊

サツ

凌雲

九龍灘を教泊

琉球

鄭嘉訓

馬ろ元

馬ろ元

張子玄

張子玄

世竹

世竹

玉之

玉之

露牛

露牛

山水

山水

松径

松径

名目や雨乃糸白くて明

松径

誰より川久知し尾を形喚  
しりりけり白木を塔のうらま  
早てあぢぬをよめておも遊り本  
庭の餌も氷くさけハ衣形り  
夢を夢よきふひのや幸あのみ  
はりりと降しものきハ衣をく  
大てのま一換とともは月を  
るのまをきりけり日のまを  
布くまきりくさけやまあす山  
推るふふあおそきもすま  
更りや沖の本御ふ冬に  
游佛くえーやあ母はまき

松徑  
乙顔  
乙塙  
五峯  
冥  
金風  
魚文  
大素  
睦之  
芳高

屋上るるや一むきく  
後の月さきふまをきり  
山くさけり同也、秋を  
庭くさけりおもひくさけり  
長きさけり、瑞元すり  
箕はけり、宿也、杏子  
半、あはれ名おけり、は  
今月也、おきり、さ  
ちくさけり、さき、北  
菴もくさけり、星を  
力ぬき、まき、さ  
さき、まき、み

石見 梨雪  
米沢 古翠  
仙臺 暁義  
江戸 瑞元  
三岳  
仙臺 士由  
春明  
下多 安隣

七月十五日長崎西念寺にある先祖  
墓の傍に墓誌あり

羈旅無一物香花不任心

嗟花のほろろ花のそとをよむ向の形

序 左山遊女

乙多き連てや函のむけはつらあ

五

以りりあはたさるもも免し使はし扇

楓橋人 朴象舩  
吳興 王周甫

松の色もさそそよまらやそそ花餅

江戸 東海  
守三

ぬきそそあつしを酒もりや候つ

成るいとつらうを燈たたりあのみ

と川をさやらあそそ一免の杖まき

紀逸  
電解  
人

十月や猶も舞はる西を左

日おしすやそけの中なる柿葉葉

水鏡をけけ此あきとおろ

花しらや岬の老女ら舞た

花の園の井戸堀あそそ袷も舞

湖たつあそそあそそ甲へこの形

端端ハ大紋をさそそすかこの南

笑けかーとすいそそあそそ

鏡花脊よ涼き月のたらし水鏡

吟や散や日和りそそあそそ

裏白やふふ年を並ふ調の鼻

明りそそ花友あそそあそそ

其年  
全  
思成  
素玉  
陶里  
蝶舞  
魯月  
秋夫  
五橋  
雨考  
碧山  
李流

掃除さす見ゆれそまことちり新茶クル米 鶴老  
 ねもさすやちりいほし秋なる雲 松魚  
 ちる後の日やさるまゝと佐渡の山 江戸五川 江鷺  
 柴の戸をぬふはる九葉ゆりり事 上千七百三 良因  
 聞し石瓦白髪親父よは焼米 下千山田 周里  
 眼のあこりすく世はありてまの字 房 卜鷲  
 可もるるよんせそや庵の自在健 吟風  
 葉既枯く期あつても枯るなり 雨鱗  
 ちる後やいふまゝは旅をほし 秋等  
 牡丹さるのちりくいとまをきさぬ 志の彦  
 その名もさるれやもさりては 了基 龜武  
 ちりさるよんせもさるいれまを中 文成

遊言上山寺  
 其のゆれと山と降ハ多のれ 羽告  
 降しちるは只中ちりて思ふ水そ 房 素共  
 思案しちる出せせ二月十日 其杖  
 ちの月竹一乃小菽の白ちり 文茂  
 義光の燈よまゝやのん子ちる 巴陵  
 六月や月よさるちり一ちる 房 里人  
 ねり木ハ地ちり入るちり鳴 房 児栄  
 秋のちやねるねる目ちるちる 房 彩葉  
 浅茅生れ目くもりかま菱珠沙花 千代 一盛  
 夜はちりや人あつてと雨 上井 湘水  
 ちるちりかり風ちる居るちる芒 原 丁風  
 木の間ちりちるちり葛の井 千代 環阿

菊すき花ハあしきまよひなり  
何れもさうさ水そ花葉の影流り  
人あしきや隣まをるる影なり  
おふ子の事やかりし春は枯  
罪状なき様さほえたり 紙より海  
影多しを御ひもの魂なり  
霞の芒此路さハさうさなり  
草花葉なり傾くまや花の雨  
あやかしきかき昇りて秋の葉  
梅香をさひなり果報はあらず  
あつたれ知事お門乃竹一帚  
あつたれお月より白くさの影

三木

文郷

義郎

半兎

藏六

萬里

彩雅

同

若武

衣重

同

其就

梧滴

三十一

江戸

さうのさうお白ハたさうさなり

三十二

雲掘

秋の川や花の山ハ花もせし

同

蝶をさしむ物もあつた火とり屯

ウツミヤ

天塊

美毛もさうさおれを涉 葵

棟高

秋すさし花の門はあつたか

東籬

子を産せし母の世さし門涼み

曉鳥

下さうさ吹ぬはあつた

兎江

花の葉はさうささし

蓬杣

雀子おはははさし

伊文

大さうおおさうささし

同

さうさしおさうささし

けし梅

さうさしおさうささし

同

おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
秋の風よおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ

三千

あきね

同

田村

同

此江

同

探原

同

東嶽

同

里川

同

おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ  
おとこころよおとこころよおとこころよおとこころよ

三千

大蕪

同

可笑

同

四暢

同

朝嵩

同

吳水

同

三千雄

同

文好

年ふらぬ髪も髪も田くか  
泡那とも蝶よ華の冠二月の如  
ひりほつてはくく深き河天の川  
舟月也かきさるし水り垢  
その戸もその水もひや強きを  
はきそとそまもも鳴け閑古き  
片只そとそまもかけりきりし凡  
接その水もその水も中まき人旅  
夕宿もちけ舟も届きたり  
菽蕪たり種も一も出さるる月の  
はもそとそまも夕飯のそとそ  
空も戸乃透る也後の呼交

江戸

文好

松雄

舟水

渭賢

之玄

同

同

同

同

春嶽

三春

舟もそとそまもハ水も似たり亀  
栗崩れ尾も夕影引や二月晴  
赤水も咫尺の軒たりなちりり  
涼もそとそまも桐たり一葉の音  
吹もそとそまも葉もそとそまも  
前もそとそまも音もそとそまも  
秋もそとそまも音もそとそまも  
小る音も音もそとそまも  
傘もそとそまも音もそとそまも  
蕨もそとそまも音もそとそまも  
口笑もそとそまも音もそとそまも  
そとそまも音もそとそまも

越後

何丸

巴陵

仙花

里人

布席

東栄

民児

松羅

以乘

既成

杉枝

蒼石

松方

大夕テ

深川



名月や毎よすのこゝろのま  
葛の蔓のたぐひのたぐひもあはれなみの月  
あやもあはれくちややはきの夕きぬさ  
無造作をくそ大なるお菊よ解  
梅もつゆ今きりりきりお湯茶中  
此をこれおとも強はれきりきり  
珍の形もさきけよみおはら  
胡蝶よおとろお木鳴もさきり  
その戸おとろお猫の二日おは  
おねおとろ門のまおのまき  
おのまおとろおのまおのま  
小向はのかおもまおのまおのま

イセ  
赤子  
野楊  
ツカル  
玉之  
杉長  
三カハ  
秋奉  
出羽  
楓二  
左洲  
六三松  
芳高  
五楼  
魯月  
戸ツカ  
賈天  
舟仙

唯て見よよきお甘味もまきの家  
佐保娘も少町もあはれうひう山  
まねもあはれおとろおのま  
半竹よはおとろおのま  
お竹よはおとろおのま  
君の代や根堀りさきおとろお  
おのまおとろおのま  
おのまおとろおのま  
世の中やおとろおのま  
山もおとろおのま  
おのまおとろおのま  
枯芦や舟のまおとろおのま

多  
桃明  
春明  
思来  
其来  
鶴老  
秋田  
羽告  
文成  
亀武  
一色  
三木  
半兔  
文郷

秋等の夜よかひの山う水  
 入おれ自らよさるゝくゝるゝまもあま  
 舞ふはなをて涼風のそゆ極夜外  
 少くはまもたけ乃白くや秋の月  
 葉ささくゝるゝ葉を吹くや秋  
 葉も一瞬の由樹吹くやとてはるゝ夜を  
 月せ出—名みやあまの夜—人あ  
 牡丹より白女子あか—海云振  
 雪の夜宿を胡へする白く赤  
 形満るゝりし—面白—葉乃主  
 吟ちくしり何きあまそ浪う照石  
 楳林たてまをとま—も多ひと秋

南都

秋等 耕六

雪振

大川

二千

竹雄

蓬仙

秋田

伊文

同

ア八

汀月

上毛

里川

水戸

三六

規外

ア八

其秀

同

ア八

方壺

全

雀芝

榊枝

岷山

篁八

生駒

芝英

青杉

秋とあき—今も水手を月夜うな  
 菊あけまのひ又へはるゝばうまはし  
 川秋や二川結せ—菊あら味  
 野突の鐘を袖も秋乃う芳  
 灯のものさくわくもくゝく水鏡  
 菊あけやるゝとて長眠る川あうい  
 づゝゝゝゝ秋のそゝゝけを蛭切—吟  
 八月の中もあまをそゝゝ田—と赤  
 何奴そ尿をりてあは花乃山  
 京へ出り水よおろゝく膝冷かぬ  
 上へ下へ更りり加茂乃よそこの能  
 本よりしとやむ時出りり山峯は月

規外  
 同  
 其秀  
 同  
 方壺  
 全  
 雀芝  
 榊枝  
 岷山  
 篁八  
 生駒  
 芝英  
 青杉

り秋をん千りや 秋夢 唐のし  
石山に石も形も千りり月  
五月の暮もいそぎぬ梅は  
春のいそぎもあかりて 放生  
夕山はくもきり引出しす  
門先もさうみのはくや  
すみまをすもいそぎも  
一日の雨よ名も形も  
人々のいそぎもあかり  
大内の妻もいそぎも  
何うもいそぎもいそぎ  
り秋や花もあかり

アキ  
古楽  
観古  
花由  
玉笑  
秋兔  
魚曆  
善水  
妻子  
紫石  
眠石  
和水

り秋をいそぎもいそぎも  
掃もいそぎもいそぎも  
柳もいそぎもいそぎも  
さし水巻のいそぎも  
暖もいそぎもいそぎも  
あかりり月もいそぎも  
雲のいそぎもいそぎも  
暮もいそぎもいそぎも  
夕もいそぎもいそぎも  
戸口はくいそぎもいそぎも  
さし水巻のいそぎも  
遠山もいそぎもいそぎも

山子  
柳枝  
柳雪  
露牛  
柳翠  
池考  
一定  
雲仙  
眠花  
了磨  
来一  
眠茶

木の下に彼をかくし禁湯の如  
雨の虫足えりも日女をうらむ  
赤の井 動くくまは遠那のりく  
あやとくも同くもほく一志を  
山里に一人をかくし人の十  
回一菊を又もかくし十日の  
沿一日和そくも余りもく  
りまや峰の後の水の水と  
割かくくも啼く秋の暮  
遠里やかくしかくも雨  
茶の島もかくも茶の島  
とくもあのおくもかくも

眠木  
寿木  
村之  
名彦  
茂松亭  
李州  
子峯  
如髮  
生佐碓  
和弁  
半岱  
河内  
氷水

松もあまのきくもいれり  
三々 粥子塔のくくも  
花のくくもくくも  
あまの松もくくも  
かく戸を誰とくくも  
行を誰とくくも  
洋一くくも  
名月やもくも  
芦の葉もくくも  
里の火もくくも  
知秋もくくも  
くくも

あまむ  
仙峩  
洲香  
龜齡  
蝶標  
兵藏  
大蕪  
藝巾  
松魚  
葉頂  
百鼎

多しれはむおもふも出たりり立ふ立  
まの風立ちくさす多うり花  
吹くは體體の中しりおきく或  
白梅すすや軒端の乾比目魚  
日影ははし土原も眠ひら夢の鳴  
草ゆきくもさるもや麻ひりみち  
似る形くも市女髪もさる多ん  
山乃木はゆきくもさるかめ鬼  
門掃くはさるも出たりり立ふ立  
挨拶もあはれかこさるくもさる  
月もりもさるもぬはちや冬も  
まはれもさるもさるもさるも

因州 遊刀羽  
秋田 南山  
江戸芝 雀堂  
下毛 兆幡  
楚雀  
はつ舟  
あき帆  
田越茶  
了千 雀芝  
カ多 李州  
一八 淇村

見むきの煙さかすりくは涼みくも  
北極くくくくくくくくくく山よ本  
山林おおくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
学くくくくくくくくくくくくく  
高のけをさるもさるもさるも  
まはれくく佛くくくくくくくく  
降くくくくくくくくくくくくく  
野く木はくくくくくくくくくく  
山吹くく用ありけくくくくく  
維くあの尾くく日ハまはれくく  
さるのおもく又後くくくくくく

三春 俳佛  
太乙  
宜明  
勿言  
一人 掬明  
梅人  
規外  
大鼓 全  
習之  
芳木  
白洲  
黛嶺

海をり川水長し〜  
まゝもやふあは新〜  
維子吟や夕日わかほ里林  
丈形り〜  
去川〜  
吟もあ〜  
大木れ〜  
まら〜  
あ〜  
あ〜  
あ〜  
あ〜  
山里と松葉

朝嵩  
鯉仙  
吳石  
其扇  
可諷  
聞之  
松平  
素考  
汀松  
雪鮮  
路川  
舟水

原の明も  
杖を思て

考〜も朝〜も早〜き勢川 春  
雨の日や同〜  
世の中〜  
言焼〜  
十月〜  
卯月〜  
山陰〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
大川を〜

霞曉  
素人  
岐陽  
東野  
藍々  
武陵  
松古  
無樂  
梧朗  
東眉  
白路  
荆玉

吹そるや従自取たり水鏡留  
次子水き海くもりやまの  
中と加し水鏡はまら上年の市  
戸を明と書く家もあり雪の月  
知りややかき神は月多のし  
事此名大下とてりはとまありま  
秋の夜や虫は入鳴くそ鳴ひり  
里人の心も多とてまき草の輪の形  
古く後根や六日もたるとありま  
名月やまみは煙たうろろまき  
法もたうとつとつとやや念佛  
雨淋しかたれ多うまらるる

1セ 魯高

京 梅價

トナ 周泉

可笑

月波 月

十二六 月居

江戸 鸞笠

巴陵

下毛 桃

同

六十六

あゝ南し秋といふもきぬと本  
水もやまらるるまき草の輪の形  
雪もつとまらるるまき草の輪の形  
時もつとまらるるまき草の輪の形  
竹もつとまらるるまき草の輪の形  
水もつとまらるるまき草の輪の形  
演講たり目をかくたるまき草の輪の形  
旅人たりまらるるまき草の輪の形  
山越しの人たりまらるるまき草の輪の形  
衾もつとまらるるまき草の輪の形  
はまらるるまき草の輪の形  
けもつとまらるるまき草の輪の形

出羽半立 文好

秋田 潦鴛

舟水

之玄

大夕 朝

全

花夕 吳

全

全

全

全

全

その此戸にあり白鳥伝や秋の蝶  
 夕風の白つゝ十もつたりふかき  
 水色如月よ暮今夕も乃中  
 日は空けりせこやをきつて終る  
 三日月を登りてありやさく人  
 火乃福を流れたりまきり家  
 ぬ月夜門よりきり竹一葉  
 きぬく如雪を鳥乃ひしり  
 あつたまうるありは回き、性  
 てふよりハ休む多きとくふか  
 月やその美草ももつれもる

半夕 三千  
 其内 其扇 全  
 秋田 可訊  
 素考 聞之  
 大夕 眉長 舟水 謂雲  
 一り 謂缸 乙二

六十七

接子のゆはくよもきこる火桶  
 拾り世をあらも男よよはれ市  
 ちのりや波つよ馬を引くも  
 むをよとよや飯はあの松高  
 草のわら松ももつれありく  
 みそくや顔も出さぬい母  
 命や和瀬の論義よりい  
 ぬりしやゆはくもおろし  
 茶をばらんねら吹くも  
 けしとやううちもきつて  
 山の井やゆはくも  
 るありきぬ松も花さきぬ

采沢 古翠 全  
 乙塙 全  
 乙 乙 全  
 松径 全  
 山水 全  
 露牛 全



西月也妻ふまゝ人もなかに出候  
新あけや鹽一しつりけし一  
咲ぬのしつりやや世世の心  
大なる世降し中世のやる今  
の月皮のえしつり梅の月  
落の葉よ白く見合致りし  
月の中世もさるる世はさりり  
松乃世世のしつり世のわし  
乃しつり世もさるる世はさりり  
乃世世のしつり世のわし  
乃世世のしつり世のわし  
乃世世のしつり世のわし  
乃世世のしつり世のわし

采沢

五峯

五千

伊文

探原

全

此江

全

田部花

全

あき帆

全

はら橋

全

津湯きよきり紙園は枯尾  
は色くし紙引さるや秋の雨  
もれはふれはふれはふれは  
松のまをを用もたすあし  
栗はたかりまきよ思ひし  
此はや田畑もあつる世はさ  
るるの世も越る世も越る  
飯けしつり世も小世のや  
世はさるる世もさるる世は  
風乃しつり世もさるる世は  
山世の世もさるる世は  
世はさるる世もさるる世は

吉

梅價

松魚

京

芙九

全

双鳥

芳武

元佛

半鬼

義郎

秋等

永我

何丸

上并

イ十八

鈴ささるも秋形もわかきもゆへに本  
 葉も山川一調くさくさるもせし  
 言ふ事や候ふちりくさるもせし  
 待懐くもわかきもゆへに戸口本  
 旅中 推す葉もまらしてせりし川あはれ  
 山原もゆるさるのこをねとせし  
 夜ぬけくさるもゆへにわかきも  
 枯るもや 候ふも吹くも野たつ尾  
 くのこももゆるさるも折ふ日なり危  
 牛乃釋つらるもゆへに門の松柳本  
 四月也蘭もゆるさるもゆへに  
 海空くもゆるさるもゆへに

江戸

俳佛

氷黒

松魚

同

大蕪

掬明

同

其秀

同

紫明

蓬杣

イ十八

五十四

三十三

三千ノク

矢りのあつた終りあつた時  
 葉も山川一調くさくさるもせし  
 言ふ事や候ふちりくさるもせし  
 待懐くもわかきもゆへに戸口本  
 旅中 推す葉もまらしてせりし川あはれ  
 山原もゆるさるのこをねとせし  
 夜ぬけくさるもゆへにわかきも  
 枯るもや 候ふも吹くも野たつ尾  
 くのこももゆるさるも折ふ日なり危  
 牛乃釋つらるもゆへに門の松柳本  
 四月也蘭もゆるさるもゆへに  
 海空くもゆるさるもゆへに

月波

全

桂羅

味博

曾牛

冷齋

月滄

仙客

青荷

湖湯

木子

揚

千ノセニ

アキタ

木子

下タテ

ヒメチ

お洞山

武ノキ

ヨク山

相ヨキ

三ハル

明安を夜たる〜  
浮巢見よか〜  
早乙女やちりき〜  
まをま〜  
梅のち〜  
まの〜  
ゆけか〜  
まの〜  
花子跡はき〜  
まの〜  
鳥の〜  
梅の〜

秋田  
水戸

峯梅

左裏

湖丈

可笑

月彼

吞河

陶里

秀彦

全

井二

全

柳

米沢

一十八

仙葉采谷

宿衛の夜

蚕沙を宿ま〜  
雲吹松や〜  
浮海松〜  
ハ翔た〜  
新毎〜  
傘を〜  
五月〜  
露玉〜  
初秋〜  
あ〜  
は〜  
う〜

橘陵

全

麓令

全

芳栖

鶴止

素律

全

雄尊

樗来

東海

僧

懐古

暮年子孫をわづらひまきや海への思  
虫のりきくをよはれ葉よや木を本  
かまんとていそくきくちり花の草  
家ひし川あまのけ備へ露の玉  
きのきくやまの雨のまをかほ  
常のちまのけしわはは川 赤  
頂唐寺や燈籠を川海と山  
日暮りきくをいそくきくちり花  
木のくと花よ帯振る花のち  
梅きくちりきくちり花のち  
面白ふ任や柳梅のりひし林  
山雀をきくちり花のち三月の月

宋沢 橘凌

イ十八 吞河 全

下二升 その女

甲府 岳臺

西湖カモ 嵐汝

クルメ 双鳥

幻化

全

馬雪

左柳

不搏

ヨハリ

その女

三河

浪兼 六 嚙

阿州 蝶 下

高野 南 塘

海山より自由千一尺くくおのち花

うまのりきくちり花のち

まきくちり花のち

る地おせりハ川のち

桜の本は芽もよおかぬ胡のち

花の香や多か子推お木下やみ

秋をきくちり花のち

暮

幻化

高野

高野

南塘

糸葺いり初きをたきて秋暮るる  
 午時うらぬ日ハ美しき九月奉  
 待香のちる也 啼乃ちあつゝ急ぐ  
 妻の月あつろよ花のつはあけり  
 猪もゆゑのあけりしちあすしき  
 白雪のぬきしきよきりりさ  
 雨よあつるあけりし秋平遠の所は  
 夕く秋の女はあつもあすしきか  
 降やあつるあけりしあつるあけり  
 人形の見てつあつるあつるあつる  
 鶯のあつるあつるあつるあつる  
 やりあつるあつるあつるあつる

洛路

化不

月耕

播多

松居

双鳥

煙島

馬雪

蝶下

幻化

クルメ

松居

アハキ

馬雪

アハキ

梅路

連句之部

月院社残暑之尋事

蛸のあつるあつるあつるあつる  
 振乃日かけもあつるあつるあつる  
 七子のあつるあつるあつるあつる  
 風ハあつるあつるあつるあつる  
 うかきしあつるあつるあつるあつる  
 快くもあつるあつるあつるあつる  
 狭あつるあつるあつるあつるあつる  
 小あつるあつるあつるあつるあつる  
 京あつるあつるあつるあつるあつる  
 昔あつるあつるあつるあつるあつる

自耕

楚泉

仰丸

楠花

尚故

昌曉

子文

宗有

梨月

耕

海松千一 角突牛とあつちか  
重五うきをほろりけし 垣  
月の幸一 淋しき形のあけハ  
置さけ袖さし 冬虫とくはく  
荒ら重た土懐宿をあたひ  
邪とくきけハ太麻奉り  
時ハ今何をも極るもあ  
田中一乃井戸おぬむ引る

因州鳥取連

暮あけくぬや本振るも  
ゆきの雪りさるよ  
姐板の上も雪乃影置る

跡さし 鶯の病のそり  
仮り橋仮り底も月の砂は  
すしかりと見らぬ海  
さねをさるるそまの雲を  
二度やう 影の透る海火  
多縁幸よ捨る杖を見さ  
後河津番を切き  
引きし 申刻下りた車  
子ぬいし 月の光るふく  
岸太とわきの海を鳴や  
押さしとも扇の乳のぬ  
おきなり神は崇りハ

泉 丸 花 故 曠 文 者 月

紫岳 季諾 南嶺

竹室 吳江 鼎門 桃宇 山嶺 宇岳 嶺宇 岳 宇 仁 岳 嶺

茶をくぐりしと知る一宗 鑑

山と川 ちかき水とささけの川

ささけの川とささけの川

玉蕉菴夜話之録奥

朝霞よ水鏡と捨りり火取虫

軒のむしとくまの摸志交らば

雲の傍尾上を松を夢しと

睡おこすまの牛借りて乗れ

夢をさすたさすとも月をさすて知

まをさすてさすとも月をさすて知

獨活たけり越路よ急ぐ人のまを

たけりたけりたけりて今に序形

後

圓

室

芝山

上里丸

山

丸

山

丸

山

丸

十一

降をさすてさすとも月をさすて知

鯨舟墓りたけりし朝日

富山や平久里の可松根はよと

名をさすてさすとも月をさすて知

月の留輪りさすとも吹かすり

年をさすてさすとも月をさすて知

池をさすてさすとも月をさすて知

吟神音し跡の塵もさ

芳かさはるよ火焚けと吟りけ

一刷毛はさすてさすとも月をさすて知

山

丸

全

山

丸

山

丸

山

丸

山

門のき掃くてもすや梅もくひ

采沢

古翠

くやうも唐くす年一う減るまゆり

乙二

鶴をくすりし白のなまは鳴き

翠

くまはのくさば細も草をまぐ

二

かく色きるやと思ふういさま

翠

家の越車一おもの落るねと

二

さや寺おおの杉の葉もさくん

翠

ろくせん廿日をとまぬおすくた

二

あゝのハハハハハハハハハハハハ

翠

涙よーくろくき水も米炊

二

牛お子ををばさるんおあを佐り区

翠

夢又くくうんく富士お遠のく

二

八十二

終の月も飛くくくく雪はさくく

翠

きまぐく笑せよおを辰出に

二

かりけの雀う粟も二夜飛を

翠

くまをく各葉よすもくもぬし

二

おくをくくお梅よんのかちり

翠

秋くまぬ日と葉のすくちを

二

持崎もところおまよ何れや

翠

お乃吹ちるるれ都巾串

翠

る代とよひよ代と何れも勢は

二

籠をくくくぬくくくくく

翠

桶お綿のきぬるあくくハハハ

二

不破お眼おくくくくく

翠



十圍るも小粒も形りし宇都の山

そのハ情けあしと二尖をともり

せめいとあし一時の月を具え

うちまをさすもあま離の種

何とやらあしくうりるをほいし

あしあしをともりしつらあま

日ハ蝕よかるとまるとあしあま

垣根りけあしはあしと引

清く亥の子やは静の餅あま

あまあまをともりしあまの

あまあまのあまはあまのあま

あまあまのあまはあまのあま

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

一一

八十一

机説

天地乃れはあまよりあまの大海もあまの秋毫もあ

まよりあまの芥子粒も大の形り其芥子粒の中一團

もあまの俳詞もあまのあまのあまのあまのあま

はあまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

吹萬堂大蕪

くくは集ふ處と口を閉て事をとくは何なる様り何なる  
ら様りおまふよこの集は舌をふるひやありとらものら又多  
のそまうを思ふくもれうひそらに凡とを足れも不二行能り  
又この集まふ山のさく枝を引きとるま中のにしよまをま  
紙のまにけりたるもれあれそそ移のまに思に何まをか  
此座の彩色のまうま移れま貼ふ振するもれなり

不<sup>二</sup>山<sup>一</sup>知<sup>り</sup>中<sup>一</sup>より一<sup>二</sup>章<sup>一</sup>を授<sup>け</sup>出<sup>し</sup>けり  
裾<sup>を</sup>を<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>路<sup>傍</sup>の<sup>樹</sup>下<sup>に</sup>總<sup>角</sup>の<sup>筆</sup>持<sup>回</sup>入<sup>入</sup>車<sup>坐</sup>を<sup>形</sup>して  
桐<sup>の</sup>葉<sup>を</sup>を<sup>穿</sup>て<sup>看</sup>る<sup>者</sup>字<sup>を</sup>を<sup>題</sup>以<sup>連</sup>向<sup>の</sup>發<sup>之</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>回</sup>ふ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>語<sup>を</sup>  
佛<sup>法</sup>を<sup>あ</sup>ふ<sup>と</sup>き<sup>け</sup>ハ<sup>先</sup>生<sup>の</sup>學<sup>ぶ</sup>ま<sup>と</sup>其<sup>先</sup>生<sup>ハ</sup>佛<sup>を</sup>佛<sup>の</sup>宗<sup>近</sup>  
形<sup>ら</sup>う<sup>い</sup>く<sup>い</sup>ふ<sup>先</sup>生<sup>ハ</sup>佛<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>又</sup>佛<sup>ハ</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>佛</sup>ハ<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>佛<sup>を</sup>  
多<sup>才</sup>と<sup>して</sup>通<sup>せ</sup>さ<sup>る</sup>は<sup>法</sup>是<sup>を</sup>り<sup>十</sup>六<sup>丁</sup>海<sup>母</sup>の<sup>奥</sup>に<sup>法</sup>文<sup>或</sup>  
着<sup>述</sup>の<sup>間</sup>隙<sup>に</sup>佛<sup>法</sup>を<sup>ち</sup>ん<sup>自</sup>白<sup>蓮</sup>先<sup>生</sup>と<sup>号</sup>し<sup>其</sup>才<sup>力</sup>を<sup>忘</sup>  
ら<sup>に</sup>子<sup>ま</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>過</sup>海<sup>せ</sup>よ<sup>と</sup>具<sup>に</sup>行<sup>を</sup>を<sup>捨</sup>ん<sup>を</sup>い<sup>子</sup>押<sup>分</sup>て<sup>十</sup>  
五<sup>丁</sup>り<sup>も</sup>柴<sup>門</sup>に<sup>扁</sup>額<sup>を</sup>仇<sup>池</sup>と<sup>題</sup>し<sup>左</sup>右<sup>を</sup>標<sup>す</sup>聯<sup>句</sup>あり

文一

○從見實出飛禽品 徐行踏断流水聲 つかかこくま石あり

不<sup>許</sup>不<sup>解</sup>聯<sup>句</sup>入<sup>門</sup>内<sup>と</sup>記<sup>し</sup>く<sup>り</sup>又<sup>る</sup>步<sup>斗</sup>り<sup>ハ</sup>岩<sup>下</sup>生<sup>木</sup>  
よ<sup>床</sup>を<sup>か</sup>き<sup>こ</sup>え<sup>上</sup>よ<sup>昔</sup>西<sup>渡</sup>の<sup>位</sup>を<sup>す</sup>り<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>法<sup>吉</sup>の<sup>鄭</sup>文<sup>舉</sup>ら<sup>餘</sup>  
杭<sup>山</sup>に<sup>法</sup>を<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>一</sup>法<sup>を</sup>も<sup>先</sup>生<sup>ハ</sup>見<sup>る</sup>は<sup>小</sup>童<sup>に</sup>上<sup>り</sup>た<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>て<sup>予</sup>  
其<sup>も</sup>と<sup>よ</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>先</sup>生<sup>を</sup>を<sup>て</sup>予<sup>ま</sup>日<sup>先</sup>生<sup>ハ</sup>を<sup>終</sup>り<sup>無</sup>聲<sup>の</sup>道<sup>邊</sup>に<sup>ハ</sup>  
何<sup>を</sup>ぞ<sup>り</sup>才<sup>又</sup>先<sup>生</sup>の<sup>何</sup>を<sup>問</sup>ひ<sup>ま</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>予</sup>白<sup>佛</sup>法<sup>を</sup>を<sup>思</sup>へ<sup>り</sup>を<sup>予</sup>  
予<sup>曰</sup>佛<sup>を</sup>何<sup>を</sup>法<sup>を</sup>を<sup>行</sup>ふ<sup>ま</sup>ん<sup>予</sup>の<sup>問</sup>ひ<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>予<sup>脚</sup>  
心<sup>忙</sup>く<sup>初</sup>め<sup>と</sup>も<sup>試</sup>よ<sup>う</sup>ま<sup>あ</sup>時<sup>に</sup>此<sup>地</sup>の<sup>佛</sup>法<sup>の</sup>形<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>遊</sup>を<sup>之</sup>事<sup>を</sup>  
予<sup>曰</sup>先<sup>生</sup>を<sup>ま</sup>ら<sup>う</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>ま</sup>ら<sup>う</sup>を<sup>捨</sup>て<sup>置</sup>る<sup>の</sup>佛<sup>法</sup>は<sup>生</sup>を<sup>と</sup>ま<sup>語</sup>  
を<sup>示</sup>せ<sup>り</sup>今<sup>四</sup>海<sup>の</sup>佛<sup>法</sup>を<sup>た</sup>と<sup>く</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>ハ</sup>時<sup>和</sup>安<sup>水</sup>の<sup>間</sup>に<sup>止</sup>り<sup>女</sup>の<sup>ま</sup>又<sup>二</sup>三<sup>一</sup>  
福<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>二</sup>三<sup>一</sup>回<sup>ふ</sup>ま<sup>或</sup>ハ<sup>二</sup>三<sup>一</sup>回<sup>ふ</sup>和<sup>安</sup>水<sup>の</sup>間<sup>に</sup>止<sup>り</sup>女<sup>の</sup>ま<sup>又</sup>二<sup>三</sup>回<sup>ふ</sup>  
ハ<sup>二</sup>三<sup>一</sup>回<sup>ふ</sup>の<sup>間</sup>に<sup>止</sup>り<sup>も</sup>た<sup>ま</sup>ら<sup>う</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>ま</sup>ら<sup>う</sup>は<sup>二</sup>三<sup>一</sup>回<sup>ふ</sup>は<sup>二</sup>三<sup>一</sup>回<sup>ふ</sup>は<sup>二</sup>三<sup>一</sup>回<sup>ふ</sup>  
より<sup>世</sup>の<sup>病</sup>又<sup>化</sup>を<sup>不</sup>怪<sup>く</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>境</sup>に<sup>其</sup>中<sup>も</sup>聰<sup>明</sup>の<sup>人</sup>ハ<sup>世</sup>の<sup>法</sup>り<sup>一</sup>  
ハ<sup>福</sup>も<sup>も</sup>其<sup>後</sup>に<sup>た</sup>ら<sup>く</sup>も<sup>備</sup>せ<sup>た</sup>と<sup>く</sup>ま<sup>ら</sup>う<sup>物</sup>を<sup>入</sup>て<sup>地</sup>を<sup>け</sup>  
て<sup>干</sup>せ<sup>ら</sup>う<sup>ハ</sup>り<sup>世</sup>の<sup>時</sup>も<sup>年</sup>あり<sup>この</sup>の<sup>君</sup>せ<sup>ら</sup>う<sup>日</sup>終<sup>り</sup>四<sup>ハ</sup>り<sup>内</sup>ハ<sup>終</sup>り





いふ其は名をいふこと二条中將為の由と志する程那をハ  
 清宿亦よ尋ふかればまこと此は江法承りて一二句を承れ

まお好種をいふもはつとて名跡かかれ

赤一子一物けよ筆根なりあつとせし

まき純よわらうと葉すこのむ字あめり

小舎くろ名をきりけと古くまき字う孫之徳の字を辨し解  
 まき細さけとて名を辨れ

十急あもまこと大粒かりかきりし

純よまき葉をきりまきけわらうと辨

はらとまき葉をきりまきけわらうと山

申お料よはるあしよのちりるまき肩をまきし  
 キのふやまきよ海茶をまきい小蓬つ枝よ須史を体まきもま  
 る三ふる又の料を欲ありし父耶はまきらまき金いせし  
 まきまきれ葉と形なり唯まきはらうとまきまきし  
 まきまきれ葉と形なり唯まきはらうとまきまきし

石よまきしと梅間よりまきまきし分徳東南よまきり布帆西北よ帰  
 ろくまきまきしと形なりまきまきけるまきれ海上に風光なり

まきまきもまきまきしと形なりまきまきし

二本枝多其の所なりかり晋まきり塚まきり

一蕉門第一女英才を感おの文

一英才よまきしと一家の交厚を興し其嗣流をまきまき

近世泥俗よまきしとまきしと角り靈魂を責まきまき

右長篇なまきしとまきしと除く

帰来飽飯黄昏の後膝を曲て枕とつらまきおき鴨の  
 蓮亂う方丈の記よ書る一期のまきまきしと枕おきまき  
 はまき生涯乃らまき折くのまきまきまきまきまきまき  
 まき身おきまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
 鴨産も何そ異しとまきまきまきまきまきまきまき

新巻おきまきまきをまきまきのまきまき

まき山稿

四海句双紙初編

丙子七月出版

同 第二編

丁丑七月出版

同 第三編

素宣社發行

板屋宮の四月晦の句は出吟の流るる海運  
は海と云々法の上り也

俳諧六體六百類題集 追って出版

吾四海句を減らしての集中なり三句一  
一句五句一を括弧又中興の作を減ら  
すも其の意は其の意なり句も括弧に或  
は其代不易の句不易の中は流れる句の句法  
の中は不易の句を減らして其の句の句法  
の中は不易の句を減らして其の句の句法  
の中は不易の句を減らして其の句の句法  
の中は不易の句を減らして其の句の句法

素宣社 玉蕉堂

